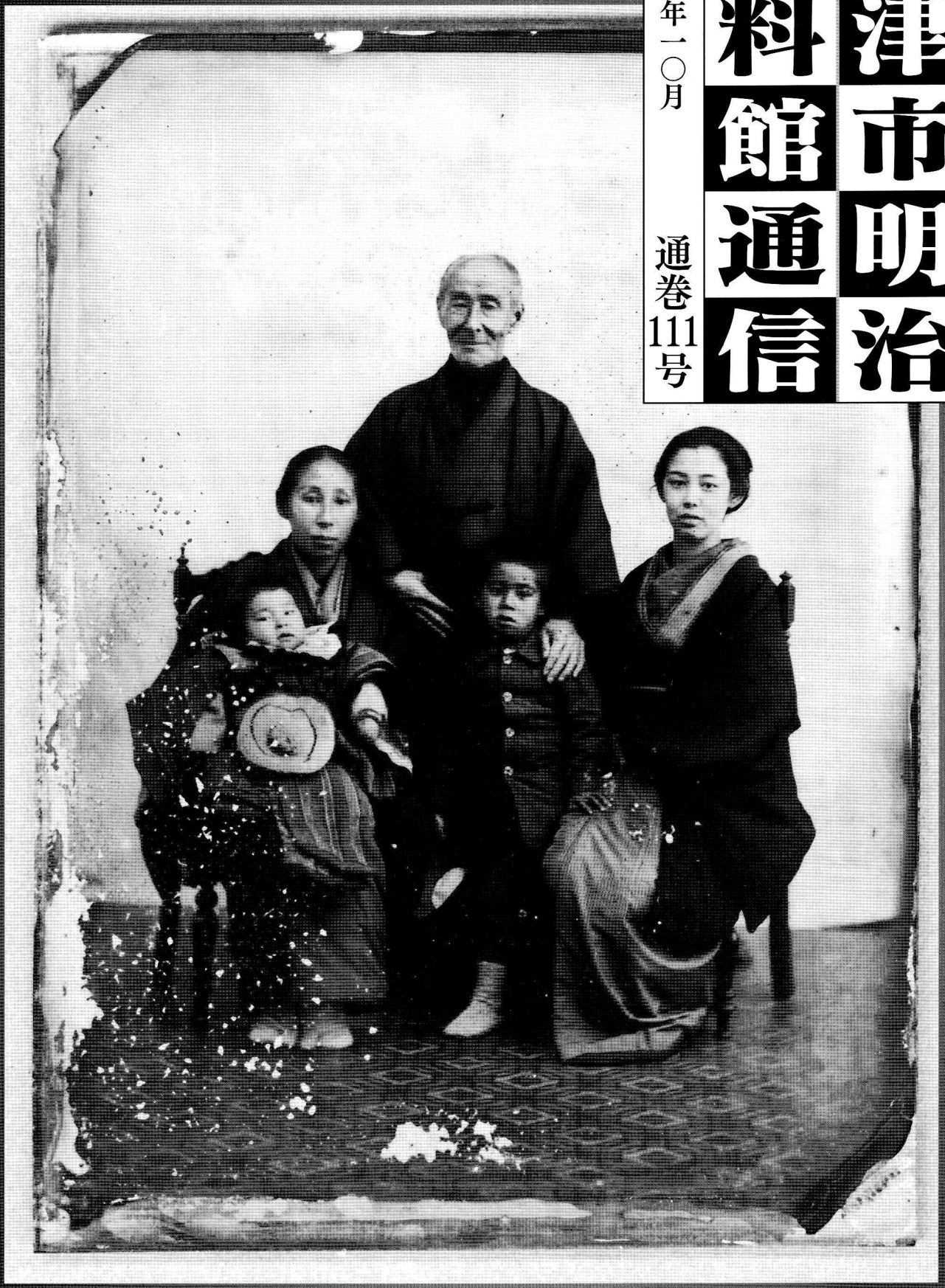
沼津市明治史料館通信
二〇一二年一〇月
通巻111号

■江原素六とその周辺54
縫子夫人の先夫加藤賢次郎



江原縫子らのガラス板写真（当館蔵）

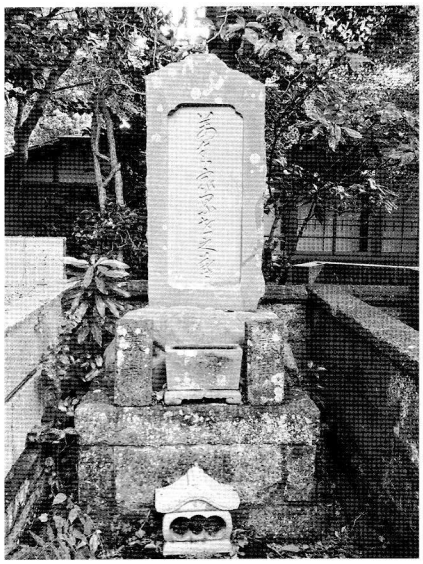
顔から判断し、前列左が江原縫子であることがわかる。立っている幼児は、素六の長男帯一（明治６年生まれ）、抱かれているのは長女なつ子（明治８年生まれ）ではないかと推測する。そうなると撮影時期は明治10年（1877）頃か。背後の老人は、縫子の父川村順次郎か。右側の女性は不明。素六の妹稲葉ます子（慶応２年時点で23歳）とは年齢的に考えにくい。

江原素六とその周辺 54

縫子夫人の先夫 加藤賢次郎

江原素六は、欧米視察から帰国後、明治四年（一八七一）一二月二六日（五年二月一五日説もあり、また後述するごとく五年六月時点ではまだ結婚していなかったように記す史料もある）、東京で川村縫子と結婚した。縫子の父川村順次郎（一八一八～九五）は、初代新潟奉行をつとめた旗本川村修就（対馬守）の長男だった。順次郎は足が不自由だったので家督を継がず、修就の後継者は次男の帰元だった。帰元の息子が洋画家になった清雄であり、縫子とは従姉弟の間柄となる。

近年、その川村清雄家に残された資料から、縫子にとって江原素六は再婚相手であったことが判明した。叔父帰元の養女として、慶応三年（一八六七）一一月に最初に嫁いだのは、幕府の奥詰銃隊に属し、フランス陸軍伝習に参加した加藤賢次郎（当時二一歳）という人物であった。しかし、翌年四月二三日、江戸開城後に大鳥圭介らが率いる脱走軍に加わった賢次郎は、下野国で戦死してしまったのである。未亡人となった縫子は、加藤家の人々（姑と賢次郎の嗣子元吉）とともに沼津に移住し、明治五年（一八七二）六月時点では静岡県第十四区（沼津）・二三五番屋敷の万年太郎方に同居していた。そこで川村家側では、縫子を再縁させるべく加藤家から離縁の手続きをとった。賢次郎を失った加藤家では、養子として元吉を迎え、明治三年（一八七〇）一一月、静岡藩から家名相続が認められていた。賢次郎が下野で戦死したことは、明治三年（一八七〇）四月になって、東京駿河台の「万年ノ弟」方に止宿していた加藤家の隠居が、戦地から帰還した賢次郎の戦友から聞かされて知ったという。以上は、落合則子「明治後期における川村清雄の作品売買の一様相―川村家の親族と三井系人脈の関係にみるパトロネージの実態―」（『東京都江戸東京博物館紀要』第一号、二〇一一年）による。



万年千秋家の墓
（沼津市・大中寺）

大正７年（1918）の江原素六・縫子夫妻
（『江原素六先生伝』所載）

ところで、維新後江原素六が移住した沼津在の西熊堂村の隣、東沢田村の大中寺に明治十年代に建てられたある墓石が存在する。無縁墓が集められた一画にあるその墓石には、以下のような碑文が彫られている。

顕正院殿□誉□□□□
孺人横山氏墓謁
孺人姓横山氏諱鏡故幕府□之□□
也出適加藤景孝景孝□□□□□□
為□世一男三女男□□□□□幕府
之□也景福奮然謀回復□克□死□
後孺人迎外孫元吉於御手洗氏為嗣
即二女之□後移駿沼津明治十四□
一月十一日病卒享年六十□□□□
大中寺初景孝□□□在墓東京□□
田孺人就寺受仏□□□□□□□□
命分髪□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□
夫凡貞□□□□□□勝其艱□□□
其□□□□□□□□□□□□□□□□
婦□□□□□□□□□□□□□□□□
明治□□□□□□□月名和謙次□

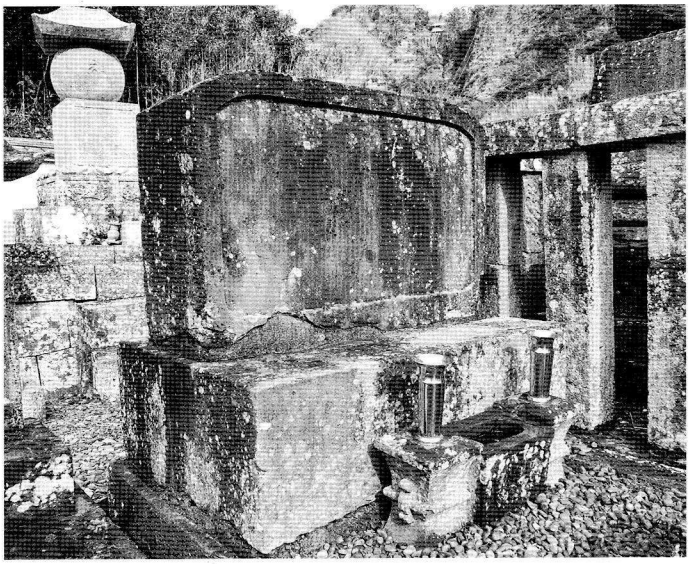
表面が劣化しているため、読み取れない部分が多いが、幕臣横山家に生まれ、加藤景孝の妻となった鏡という女性の墓であること、幕府の回復を謀った息子景福が死亡したため、外孫である元吉を御手洗家から養子に迎えたこと、鏡は移住した沼津で明治一四年（一八八一）一月に没したことなどが判明する。碑文の選者は、沼津兵学校附属小学校教授の漢学者名和謙次である。

右の碑文の内容からして、この加藤家とは縫子が嫁いだ家であり、景福とは賢次郎のことを指していると考えられる。後述する加藤家所領の相模国の村に残された、文久三年（一八六三）・元治二年（一八六五）の年貢皆済目録には、「加賢次㊞」と署名・押印がなされており、その印章は「景福」と読めるので（『近世平塚の領主たち―領主の印判と花押―』、一九八三年、平塚市役所）、このことが裏付けられる。また、嘉永四年（一八五一）の皆済目録には「加源左㊞」とあり、印章は「景孝」となっているので、景孝の通称が源左衛門であったこともわかる。加藤源左衛門は、将軍家慶・家定の代、嘉永・安政の頃、小納戸をつとめ、小石川三ノ丸跡で三〇〇坪の屋敷を構えていたことが知られる（『柳営補任　六』、『諸向地面取調書（一）』）。

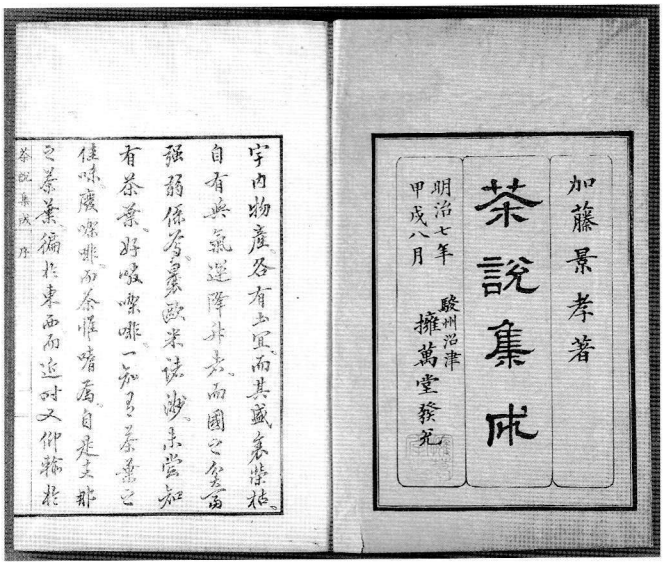
同じ大中寺には、幕府陸軍の砲兵士官から沼津兵学校教授となった万年千秋（鎮太郎・隠岐守）の家の墓石も残っているが、実は万年家と加藤家とは姻戚であった。すなわち、千秋の妻藤は景孝・鏡を父母とする、加藤家の長女であった（樋口雄彦「沼津兵学校関係人物履歴集成」『沼津市博物館紀要』22、一九九八年）。縫子を含む加藤家の人々が同居していた沼津の万年太郎方とは、千秋の息子万年昭明のことではないかと推測される。明治六年（一八七三）時点の「沼津城内原図」（当館蔵）には、沼津城の外堀の西北角に面した一六〇番という屋敷に「加藤元吉」の名前が記されているほか、九年（一八七六）の「日枝神社氏子帳」では、一六六番という屋敷に「加藤元吉」「万年昭明」が、それぞれ家族人数二名、四名（男女各二名）で居住していたことが記録されている。

東京駿河台の「万年ノ弟」方に止宿していた隠居とは加藤景孝のことであり、万年の弟とは幕府オランダ留学生だった内田正雄（恒次郎）のことであろう。

夫の死亡により加藤家から離縁となった縫子は、やがて江原素六と再婚するに至るのであるが、そもそも加藤家も沼津に移住していたこと、姻戚である万年家当主が沼津兵学校に在職していたことなどから、ごく近い存在として江原が結婚相手の候補に浮上したのかもしれない。縫子は江原との間に四男三女をもうけ、昭和一〇年（一九三五）八五歳で没した。



旧幕府軍戦死者墓碑（静岡市駿河区・宝台院別院）
江原縫子の先夫加藤賢次郎の名が刻まれている。



加藤景孝著『茶説集成』（当館蔵）
1874年、沼津擁万堂刊。製茶に関する解説書。

慶応四年四月一九日に宇都宮で戦死した旧幕臣に伝習第一大隊差図役「加藤鎌三郎」なる人物がいる（『幕末維新全殉難者名鑑』第四巻）。また、同年四月二三日、同地で戦死した御料兵差図役下役「加藤覧三郎」という人物もいる（「慶応兵謀秘録」『改訂維新日誌』第六巻）。しかし、静岡市駿河区・宝台院別院に建てられている、伝習隊などに属した一一五名の名前を刻んだ旧幕府軍戦死者墓碑には、四月二三日没の「加藤賢次郎」の名前があり、その名に間違いはないであろう。

『旧高旧領取調帳』によれば、加藤賢次郎の所領五五〇石は、相模国大住郡（現平塚市・伊勢原市・秦野市）の五か村にあった。このことから、加藤家の家系は小姓組・書院番・小納戸などをつとめた家柄だったことがわかる（『新訂寛政重修諸家譜』第十三、三六頁）。江原家よりも家格・職歴・禄高ともずっと上であった。

賢次郎の父と思われる加藤景孝は、明治政府に出仕し内務省戸籍局などに勤務、『茶説集成』（明治七年、沼津擁万堂）、『製茶一覧』（明治九年）、『蒔絵一覧』（明治五年）といった著作を世に出した。外国奉行・若年寄などを歴任した元旗本で、『茶説集成』の序文を書いた平山省斎は、景孝のことを「我友」と記している。加藤家の跡取りとなった元吉は、沼津から上京したらしく、明治二三年（一八九〇）頃には東京赤坂区青山南町に住んでいた（『静岡育英会会員姓名録』）。元吉の実家御手洗家とは、大砲組之頭として万年千秋と同僚だった御手洗幹一郎の家ではないかと推測するが、確証は得られていない。

（樋口雄彦）

夏休みイベントの結果　～こんなことをしました～

戦時中のくらしを体験しよう

8月8日㈬実施　28人参加

市内の小学4・5・6年生が参加し、戦時中の話を聞いてからすいとんを作って食べました。

戦時中の話では、昭和20年7月17日の空襲で右足の膝から下を失った岩下さん（当時小学1年生）がどんな辛い思いをしたか、親や周囲の支えで生きてこれたことを感動的に語ってくれました。

すいとん作りは金岡地区のご婦人の協力のもと4つのグループに分かれて、粉をねったり、野菜を切ったり、薪をくべたりとみんな一生懸命にとりくみました。

平和を考える戦争史跡めぐり

8月3日㈮実施　中学生　14人参加
8月5日㈰実施　親子6組14人参加

市内の各所に残る戦争史跡をバスで見学しました。

海軍技術研究所址碑（第3中学校付近）を手始めに震洋・海竜の格納壕（江浦）、海軍技術研究所の地下工場跡（多比）、戦時疎開学園の建物（我入道）、高角砲部隊の弾薬庫（中沢田）、拓南神社（足高）、海軍工廠工員養成所跡碑（神田町）などを見学してきました。

参加者からは「沼津に戦争の跡がこんなに残っていることを知らなかった」という感想が聞かれました。

中学・高校生のための一日学芸員体験講座

8月9日㈭実施　14人参加

「学芸員」という職業に関心のある市内の中学・高校生が参加しました。

午前中は、当館学芸員による講義「博物館と学芸員」を聴き、館内を見学しました。普段は見ることができないバックヤードなども見ました。午後は、学芸員の指導のもと実技「資料の取り扱い方」に挑戦しました。当館で所蔵している本物の資料を実際に扱う実技で、とても緊張しながら真剣に取り組んでいました。

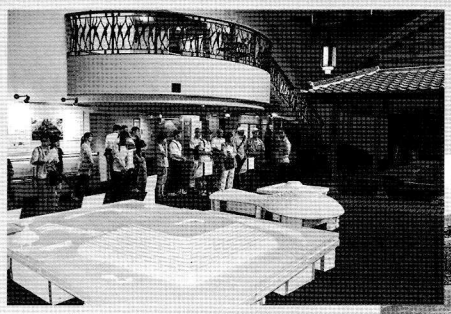
企画展 スルガの古墳 ～高尾山古墳が語るもの～ 好評のうちに終了！

会期：8月1日㈬～9月30日㈰

当館のすぐ近くで発見された「高尾山古墳」を中心に、周辺の古墳を紹介した本展。「最古の古墳か？」という報道もあり、みなさまの関心も高く、会期中1,373人という多くの方にご観覧いただきました。

また、企画展関連イベントとして、体験講座「勾玉作り」、「子ども古墳教室」を開催しました。どちらも小学生を対象として開催し、古墳について学びました。

企画展恒例となっておりますギャラリートークは、会期中5回開催し、そのうち4回を沼津市文化財センターの職員4名が1回ずつ担当し、1回を博物館実習生が担当しました。



ギャラリートークの様子
文化財センターの木村さんが熱く解説しています。手前の高尾山古墳の1/20スケールの模型は館員の力作です。

「子ども古墳教室」の様子
文化財センターの池谷さんの案内で高尾山古墳を見学しました。

写真展「沼津市民の戦争と生活」を開催しました

8月11日㈯・12日㈰の2日間、沼津西武連絡通路を会場に開催しました。展示準備から展示作業、会場での解説など、当館の「戦争体験を記録する会」のメンバーが主体となって開催したものです。

12日㈰にはイベント「空襲体験談を語る」を開催し、メンバーである水野義彦さん、岩下佳子さんが体験談を話しました。

▲展示の様子
メンバーが来場者に解説しています。

イベントの様子 ▼

沼津市明治史料館通信
第111号
平成24年10月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410－0051 沼津市西熊堂372－1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印　刷
みどり美術印刷株式会社